

I サムエル 25 章「主のみこころにかなう賢明さ」

主に委ねて待つべきなのに、思いのままに行動してしまうことがあります。すぐに行動を起こすべきなのに、対処できないでいることがあります。どうしたらふさわしい判断ができるでしょうか。

1. 頑迷なナバル (: 1~13)

24 章では、サウルがダビデと和解したようなことばがありました。二人は別れて行き、サウルは家へ帰り、ダビデと部下たちは荒野の要害での生活が続きます。

そのような時にサムエルが死にました。全イスラエルは悼み悲しみ、彼を葬りました。サムエルはイスラエルが士師の時代から王政の時代に移る時期に神が立てた指導者でした。サウルに油を注ぎ、そしてダビデに油を注ぎました。しかし、ダビデが王になる前にこの世での生涯を終えました。

ダビデとサウルの間に立ってくれる存在がいなくなりました。そのためにサウルが再び敵対するかもしれないとダビデは恐れたのでしょう。パランの荒野に下って行き、ユダの地から離れました。

それからしばらくしてダビデは再びユダの地に戻ったようです。ここでマオンにいた一人の人が登場します。ナバルという人で、非常に裕福で、多くの羊とやぎを持っていました。ナバルは「頑迷で行状が悪かった」のですが、対照的に彼の妻アビガイルは「賢明で姿が美しかった」とあります。また、ナバルはカレブ人で、ユダ部族の中で家系的にも、経済的にも恵まれていた人でした。

この時、ナバルはユダの町カルメルで羊の毛の刈り取りをしていました。羊の毛を刈り取る時は祝宴を行う時でもありました。このことを聞いたダビデは部下の中から 10 人の若者をナバルのところに遣わして、メッセージを伝えさせました。

まず平安の挨拶をします。そして、カルメルでナバルの羊飼いたちがダビデの部下たちと一緒にいた間、羊飼いたちに恥をかかせたことはなく、群れから何かが失われたこともなかったと言います。つまり、ダビデの部下たちは自発的にナバルの羊飼いたちと家畜の群れを守っていたのです。そのように良くしてきたのですから、祝いの時に、何か手元にある物を与えて欲しいと伝えたのです。

ダビデの若者たちはナバルのところに行ってこのメッセージを伝えました。それに対するナバルの答えは 10~11 節。侮辱したことばを返しました。サウルからいのちを狙われているダビデのことを「主人のところから脱走する家来」と言っています。そんな者たちにどうして、自分たちの得た祝福を分け与えなければならないのかと言います。自分の羊飼いと群れが守られたことを感謝するどころか、恩を仇で返す態度でした。

このようにナバルは、名前の通りに「愚か」で、「頑迷で行状が悪かった」と言われることが分かるような態度でした。彼は自分の豊かさは自分の力で手に入れたと思っていたのでしょう。神にも人にも感謝していなかったのでしょう。傲慢で人を思いやることはありませんでした。私たちはそうではなく、神から与えられている恵みに感謝して、神に献げ、人々を助けるために用いる者であるようにと教えられます。

ダビデの部下たちは戻って来て、ダビデに一部始終を報告しました。するとダビデはすぐに部下たちに戦いの準備をさせます。200 人を荷物のところに残し、400 人を率いてナバルのところに向かいます。ダビデはナバルの態度に対して怒り、自分で復讐しようとしています。

2. 賢明なアビガイル (: 14~31)

その一方で、ナバルの周囲ではどうだったのでしょうか。14 節。ナバルに仕えている若者の一人がアビガイルにナバルのしたことを告げました。そして、ダビデの部下たちが自分たちにどれほど親切にしてくれたかを報告しました。そして、しもべはアビガイルに勧めます。

17 節。これを聞くとアビガイルはすぐに行動を起こします。贈り物を準備し、ダビデのもとに届けようとして向かいます。その途中で、ちょうど向かって来たダビデの軍勢と出会います。ダビデは言っていました。「あの男は善に代えて悪を返した」とは確かにそうです。けれども、「あの男に属する者のうち小童一人でも残しておくなら」と言って、皆殺しにすることは過剰な反応です。自分の感情や行動を抑えられなくなっています。

そのような時には神の恵みによる介入が必要です。神様はアビガイルをダビデのもとに遣わしたのです。

アビガイルはダビデの足もとにひれ伏して、語ります。ずダビデの怒りを鎮めます。彼女は「あの責めは私にあります」と言います。ナバルの代わりに自分に責めを負わせて欲しいというのです。それから、彼女はダビデの心を主に向けさせます。26節。主は、ダビデが無駄な争いをして血を流しいのちを奪い、自分の手で復讐することを止められたと言います。28節で「主は必ず、ご主人様のために、確かな家をお建てになるでしょう」と言います。王になるということです。また、「ご主人様は主の戦いを戦っておられるのですから」と言います。ダビデはゴリヤテとの戦いの時に「この戦いは主の戦いだ」と宣言し勝利して以来、主の戦いを戦っており、やがてイスラエルの王になる方だとアビガイルは受け入れているのです。そのような方だからこそ、「あなたのうちには、一生の間、悪が見出されてはなりません」と言います。イスラエルの王になる者としてふさわしく歩むようにという忠告です。神の恵みも語っています。ダビデのいのちは「神、主によって、いのちの袋にしまわれています」と言います。それとは対照的に、敵のいのちは主が投げつけると言います。

そして、最後にまとめています。30～31節。アビガイルは主がダビデをイスラエルの王として立てることを信じています。そして、自分で復讐することが、王になったときにつまずきとなるので、そうしないようにとどめるのです。

このアビガイルのことばは主のみこころにかなうものでした。ダビデの心を主に向けさせるものでした。彼女の賢明さが表れています。彼女の賢明さは主によって与えられたものです。それゆえに主のみこころにかなうことばを語る事ができたのです。主が与えてくださる賢明さによって語ることばは、聞く人の心を主に向けさせ、主の警告と恵みを示し、聞く人が主のみことばの約束に立つようになるのです。

3. 主に委ねる (: 32～44)

ダビデはアビガイルのことばを聞き、落ち着きを取り戻しました。主が彼女を自分のところに送ってくださったと理解しました。32～33節。自分の手で復讐することをやめさせてくれたアビガイルに感謝し、彼女を送ってくださった主に感謝しています。「もし、あなたが急いで私に会いに来なかったら」と言っているようにダビデは、彼女の家も自分自身も間一髪のところまで救われたことに感謝しました。

そして、ダビデはアビガイルから贈り物を受け取り、「安心して、家へ上って行きなさい」と言いました。

アビガイルが家に帰ると、ナバルは宴会を開いていました。翌朝になってから、出来事について告げました。それを聞いたナバルは「気を失って石のようになった」とあります。そして、十日ほどたって、彼は死にました。主が彼を打たれたのでした。

39節。ダビデが自分の手を下すまでもなく、主がナバルの悪に対して報いられました。このことはダビデにとって大きな励ましになったと思います。主が正しいさばきを行われることの確信を強くしたことでしょう。サウルとの間も主が正しく導いてくださることを信頼し、主の時を待つように委ねることができたでしょう。

その後、ダビデは使者を遣わして、アビガイルに結婚することを申し入れます。41節。ここでもアビガイルは謙虚に行動し、語ります。そして、申し入れを受け入れますが、「女奴隷となりましょう」と言います。これは主に対する信仰から出ている態度です。

アビガイルは急いで用意をして、使者たちの後に従い、ダビデの妻となりました。ユダ部族の有力者の未亡人アビガイルと結婚したことが、後にダビデがまずユダ部族の王として立てられる助けとなったことでしょう。

人の罪深い行いが重なっていても、主のご計画は進んでいきます(ローマ8:28)。ダビデとアビガイルの人生におけるこれらの出来事の背後には、主の導きがあったことを私たちは知ることができるのです。

主がダビデを止めるのにアビガイルが用いられました。彼女は夫ナバルの悪の行いに対処するために速やかに行動しました。そして、怒りに燃えていたダビデの心を主に向けさせることばを語る事ができました。主のみこころを正しく受け止め、伝える事ができました。敬虔で謙遜でした。そのような賢明さを主が彼女に与えていたのです。

私たちも主に委ねて待つべきことと、すぐに対処すべきこととをふさわしく判断することができるように祈りましょう。神のみことばに聞き、みこころに従おうとする祈りを絶やさずにいましょう。